

採卵種鶏における誘導換羽実施適期の検討

○阿部静¹・福澤陽生¹・山本力也¹・大平進¹・樫孝英¹・木内浩雅¹・美濃口直和²・安藤学²・筒井真理子¹
(¹家畜改良セ岡崎・²愛知農総試)

〔目的〕我々は、誘導換羽法が産卵性能及び卵質性能を改善するのみならず、繁殖性能（受精率、ふ化率）改善効果も示すため、採卵種鶏に対しても有用であることを日本家禽学会 2010 年度秋季大会にて報告した。今回は、実際に後代を採取する場合、どの時期に誘導換羽処理を実施することが適当かを推定するため、各種処理が種鶏にとって最も重要である健常なひなの生産羽数（良ひな取得羽数）に及ぼす影響を調査した。

〔方法〕白色レグホン種（試験開始時約 500 日齢）を 4 区（絶食区、ふすま主体飼料区、市販誘導換羽用飼料区及び無処理対照区）に割り当て、採卵鶏用ケージに 1 羽ずつ収容した。絶食は 14 日間、ふすま主体飼料及び市販誘導換羽用飼料は制限給与をそれぞれ 20 日間及び 17 日間実施した。期間中（処理開始後 114 日後まで）産卵率を調査すると共に、試験開始前 30 日と処理開始後 35 日、49 日、63 日、77 日、92 日及び 105 日後に各区 30 羽に人

工授精を行い、それぞれ 7 日後から 12 日間種卵採取を行い、ふ化率と良ひな取得羽数を調査した。

〔結果〕産卵率は、誘導換羽処理開始後 39 日までに全ての処理区が試験開始時の水準に復した。ふ化率は、ふすま主体飼料区の 63 日以後の成績が市販誘導換羽用飼料区や無処理対照区の成績を上回る等の改善効果が認められた。一方、良ひな取得羽数は、全ての処理区でほぼ全期間、無処理対照区と比較して有意に増加した。特に、ふすま主体飼料区の 35 日と 63 日後の羽数増加が顕著であった。以上の結果から、採卵種鶏に誘導換羽を実施する場合、種卵採取開始日の 112 日前から 42 日前(人工授精実施 105 日前から 35 日前)までの間に処理を開始することが望ましく、特に 70 日前から 42 日前の間に処理を開始するとより多くの良ひなが得られることが示唆された。（この試験は「平成 22 年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」の一環として実施した。）

採卵種鶏における誘導換羽実施適期の検討

○阿部 静¹・福澤陽生¹・山本力也¹・大平進¹・檜孝英¹・木内浩雅¹・美濃口直和²・安藤学²・筒井真理子¹
(¹家畜改良セ岡崎・²愛知農総試)

演題希望分類：繁殖・生理

(遺伝・育種、繁殖・生理、疾病、飼料・栄養、経営・管理・畜産物利用、より選択する。)

優秀発表賞の対象者：

(講演者が発表時点で学生あるいは満 30 歳以下の場合は、◎印を付ける。)

(最低限検討して頂きたい事項)

1. 発表者 美濃口さんと安藤さんを入れるのは決まり。他の並びもこのような感じでよいのでは？
2. 試験結果等が実施内容と齟齬がないか
3. 成績概要

	ふすま	市販	絶食	対照
有意差	1 区	2 区	3 区	4 区
	良ヒナ獲得羽数			
	前半(12～7日貯卵)		後半(6日～1日貯卵)	全期間
前	無し		無し	無し
35日目	1 と4、3と4		1 と4、2と4、3と4	1 と4、2と4、3と4
49日目	1 と4、2と4		1 と4、2と4	1 と4、2と4
63日目	1と2、1と4、2と3、3と4		1 と4	1と2、1と4、2と4、3と4
77日目	1と2、1と4、2と3、3と4		1と2、1と4、3と4	1と2、1と4、2と3、3と4

92日目	1と4、3と4	1と2、1と4、3と4	1と2、1と4、2と4、3と4
105日目	1と4、3と4	1と4、3と4	1と4、2と4、3と4

有意差

	対入ふ化率
	全期間
前	無し
35日目	1と4
49日目	無し
63日目	1と2、1と4、2と3、3と4
77日目	1と2、1と4、3と4
92日目	1と2、1と4、1と3、3と4
105日目	1と2、1と4

